

<p>団体名</p>	<p>NPO法人E-LINK</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>都市部のこどもに安心できるつながりをもたらすお寺の居場所プロジェクト</p>	
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>	
<p>●望ましい社会状況（ビジョン）</p>	<p>当法人の実現したいビジョンは、田舎のような都会「トカイナカ」の形成である。都会の中でも人と温かい繋がりを持ち、「安心と互いに尊重できる人間関係に囲まれ、遊びの中で思いやりと自己表現を育む社会」である。具体的には、身近に自分の思いを伝え、許容してくれる存在と、ロールモデル的存在が身近にいることである。そんな環境だからこそ、自分をさらけ出し、興味の赴くままに行動することで、自分を受け入れ、他者を考慮した自分の表現を身につけられる社会である。 □ □</p>		<p>お寺の地域の居場所 「おちゃま」</p>	
<p>●団体の社会的役割（ミッション）</p>	<p>当団体の社会的役割（ミッション）は、「なまらツナガル」（どんどんつながる）である。人との安心できる対等な関係性をつくっていく上で、多くの人と繋がることが、自分の知らないものに出会い、自分の学びや、自分に合ったあたたかな人間関係につながる。当法人はそのために具体的に以下の3点を行う。 ①こどもに寄り添う最初の一人ができる居場所をつくる ②子どもと地域の人イベントを通してつながる交流機会をつくる ③子どもと地域の人協同してプロジェクトを行う機会をつくる</p>			
<p>●団体の活動基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●人的資源：子どもとの信頼関係を築き、多世代とつなぐ学生ボランティアが主体的に関わり、組織運営を相談できる身近なアドバイザーがいること。 ●物的資源：子どもが地域で挨拶できるお店や施設があること。また、こどものコミュニケーション・好奇心を促す資材・物品が団体のつながりからまかなえること。 ●活動資金：プロジェクトに必要な物品・資材を得られるのに十分な資金を、自己資金として調達できる土台が整っていること。 ●情報：子どもとの信頼関係づくりや人をつなげるノウハウを基に主体的に動くことができるのに十分な情報を得られること 			
<p>■活動報告</p>			<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>助成2年目は、ワークショップを通じた高齢者との接点づくりを試みていたものの、子どもたちとの交流機会がなかなか作れなかった。そのため、新年度から地域食堂として展開することで、対象を子どもを中心とした地域の多世代とし、かつ、厨房での高齢者の活躍機会をつくった。また、年度の変わり目をきっかけに、これまで参加していた子どもたちの世代が入れ替わり、また、地域食堂の影響もあり、1学年に集中していた参加者は多学年の交流へと変わっていった。 結果として、高齢者との交流機会は想定より少なかったものの、他学年との交流、保護者の参加、調理スタッフ、地域住民の参加により、より多くの世代と交流のできる場所となった。厨房での子どもの調理参加により、調理スタッフとの交流が生まれ、赤ちゃん連れの親子が、小学生に赤ちゃんのお守りを任せ、親が調理の大学生と話したり、進学を考える生徒が少し上の先輩に相談をできるような交流機会がうまれる場所となった。</p>			<p>助成2年目の目標は、昨年度に引き続き、週に1度開所しているこどもの居場所に高齢者の活躍機会をつくり、地域高齢者とのより幅広い世代との交流を通して、「世代を跨いだ地域ぐるみでの子育て」を実現していくことであった。当初の予定では高齢者を巻き込むワークショップを検討していたが、度々高齢者の参加者はいたものの、子どもの世話をすつもりで来てくれるが同世代同士の遊びで熱中する輪にうまく交わらず継続的な交流を生むことはできなかった。社会福祉協議会の協力のもと、高齢者団体へのアプローチを試みるものの、そもそも中央区創成東地区に高齢者の集まりがなく、その核からつくる必要があることを知った。そのため、今年度からは毎週地域食堂を行い、子どもの世話とは別に高齢者の活躍機会を創出した。メディアでの露出も多かったものの、高齢者の手伝い参加は少なかった。しかし、新たな保護者の参加、多学年の参入、調理の学生スタッフの参加により、これまで以上に他世代での関わりが確立され、1人でもふらっと遊びに来て、初めての子どもたちの中でも安心して遊び、世代を跨いでコミュニケーションをとれる場をつくることのできた。</p>	
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<p>一年を通して、こどもの中での学年にばらつきができることで、どの学年の子が1人で遊びに来て新しい友達と1度目から仲良く遊ぶことができる土台ができた。また、高齢者の活躍機会創出のためにできた週1回の地域食堂は、結果として、高齢者以外にも親世代、社会人、子育て世代を巻き込むこととなり、これまでの「子どもの居場所」から「子どもを中心とした地域住民の居場所」に変化していった。高齢者を巻き込む活動の中で、社会福祉協議会と連携する中で、都市部マンションの多い中央区創成東地区では、アクティブな高齢者団体自体が少ないことも明らかとなった。地方の町内会を中心とした高齢者の活躍機会が少ない分、子どもたちのための高齢者の参加が、ひいては高齢者の居場所をつくることにも寄与していく展望ができた。</p>			<p>今年度を通して、「子どもを中心とした地域住民の居場所」となり、子どもがサードプレイスとして安心して地域の多世代と関わりができる交流の場を創出することができた。また、小学校や社会福祉協議会との連携やメディアでの露出により、地域に認められた場所になってきている。しかし、都市中心部、タワーマンションが増えているこの都市開発地域で、親戚、お隣さんとの関係が断絶されている現実に、その代わりとなる、より大きな輪の中で子どもたちに多世代にふれる機会を増やしていくことが不可欠である。活動の拠点である寺を、子ども・地域の居場所とするほか、中高生の活動場所、大人の姿を見れる場所として展開してきたい。</p>	
<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>「子どもの居場所」から「子どもを中心とした地域住民の居場所」となり、子どもがより多世代との交流を持ち、「世代を跨いだ地域ぐるみでの子育て」の場の創出</p>
<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>子ども同士の交流のほか、子育て世代の親子、調理スタッフ、地域住民の参加により、小学生にあかちゃんのお守りを任せたり、こどもが調理を手伝ったり、進学の相談を少し上の先輩に相談できるような交流機会が生まれた。</p>	